

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別換承認雜誌第六二七号
平成二十八年三月一日発行(第百十九卷第三号)

ホトトギス

三月号



俳句随想〔四百五〕

汀子

少子化と言われる今、子供たちの教育の場がどの様に変わってきているのかは分からないが、昔の様な上からただ教えるというようなやり方ではなくなっているようである。自主性を重んじ、さらさらと発言する積極性が要求される時代になって来た。

ある会で若い親が子供の教科書に載っている俳句について言った。「昔の教科書に載っている俳句は良かったが、今は訳の分からない現代俳句が載っているですよ。子供たちがこれらを見てこれが佳い俳句と思ったら情けない」と言う。「虚子の句も載っているが「春風や鬪志抱きて丘に立つ」という背景の深い句なので、もっと分かりやすい「咲き満ちてこぼる花もなかりけり」などが選ばれて欲しかった」とも言っていた。まことに親という立場で、特に有季定型を守っている俳人の立場から見れば、ごもつともな意見であると思う。しかし、よく考えて見れば、俳句の良し悪しは、その俳句の持つ内容が分かりやすいこと、季題が一句の中でよく働いていること、余韻の広がりがあること等々、その一句から受けた印象から、子供心にも一句の良し悪しを自分で見て判断しなければならぬのだ。最初は難しだろうが、色々作品を見て行くと、それらは自ずから感じ取り、心惹かれて行くようになるのであるから、訳の分からない俳句を見るのも、佳い作品を見分けるための導入になるのではないであろうか。子供もやがて一句の良し悪しを体得しながら成長していくであろう。

句日記 汀子

平成二十七年三月二日 ホトトギス社春の吟行会

さういへばミモザの花の頃のこと
梅一樹より二歩三歩五歩六歩
紅白の中に野梅も加はりて
計画はふたたび三たび春の雨
書き出せば一文すべりゆける春

三月二日 ロイヤル俳壇

すらすらと書きしは夢よ大試験
大方は積もることなく春の雪
立ち向かふ気力は若さ大試験
この辺は人住まぬ里水草生ふ
積もること期待も少し春の雪

三月七日 若屋ホトトギス会

やうやくに木々をうるほす春の雨
飾りたる菱餅に雛小さくとも
暖かきことが決意をうながせる

三月八日 下朗句会

木の芽雨上がりたるより木々目覚め
ひるがへる遠くの景色つばくらめ
つつがなきこと有難く朝寝して

三月十日 大阪倶楽部

春塵のはるかが迫り来てをりぬ
鳥帰る空の一劃伸びてをりぬ
水取の近づく荒れと諾へりぬ
明るさに安心してはならぬ春
た起草の芽と呼ばれたる名草の芽
水取の日の近づけて寒る予報
書き上げし一稿に春寒を解く

三月十日 綿業倶楽部

飾りある雛が留守居をしてくれし
春の山より動き出す季節かな
水取の荒るるは案の定といふ
小さき雛ひそめしよりの旅靴
六甲の山に春めく色を置く

三月十二日 清交社

春泥を踏み来し靴と知られけり
董咲く吉野への旅近づけて
足許の董も吉野山のもの
旅仕度花の遅速を問ふことも
春暖炉つかず離れず椅子置かれ
思ひ出は消ゆることなし春炉燃ゆ
庭に摘み来し董とて香を束ね

三月十三日 工業倶楽部

留守がちのわが家に飾る雛かな
お水取過ぎてやうやく旅プラン
いくたびもぬぐふ春塵はや目立つ
雛飾るより客を待つ心かな

三月十四日 関東ホトトギス俳句大会前日句会

案の定舞ひははじめたる春の雪
春寒といふより風の痛きほど
選ぶ道葉先生は春泥に
日の射して明るき春の雪となる

三月十五日 関東ホトトギス俳句大会

岷々とする雪嶺春を置き初めし
ただならぬ春寒星座彩りぬ
雪嶺を春めくものと見る旅路
山容を隠しはじめし春の雪
赤岳の射して春の雪止む心かな

三月十六日 朝日カルチャー句会

旅先で出会ひしことも春めける
旅共たせしを語らんあたぬ返しも
暖かき外出身軽な第一歩
手放しで安心出来ぬあたたかさ
ことなくふくらんでぬし春の山
稿値を半分果たし雲雀野へ
あたたかき色を選べば自ら

三月十七日 有恒俳句会

朝寝して時間に追はれたる一日
はるか来て雪解の山に包まるる
春の雪など勿体なく出来ぬ旅
ふと悼む心よせめてあたたかし
三月十八日 夏潮句会
雪嶺を見し目に庭の初桜
信州の旅より覚めず山笑ふ
笑ふ山見つつ雪解の山のこと
初花が咲いて笑ますと庭に客
友癒えよ山も笑つてをりしこと
計りごとありみ吉野の花を待つ
みよし野の桜に合はすスケジュール
三月二十六日 さざり草句会
約束の原稿送り春めきぬ
初桜家居の日々とならざりし
待ちし日に春めく心もたらせし
三月二十六日 アネモネ句会
朝寝して誰に気兼ねをしてぬしか
朝寝覚め写真笑つてをりにけり
いくらでも朝寝の出来ること淋し
堂々と朝寝の顔の現はるる
健康を取り戻したる朝寝かな
みよし野へいざなふ花となりぬべし
三月二十七日 時雨句会
鮎子の豊漁と聞くばかりかな
東風吹けば旅路華やぎをりにけり
みよし野へ花の旅路のスケジュール
強東風にぐらう着陸態勢に
配られし花の案内の一頁
三月二十八日 句会と講演の会
斑雪にも彩るといふ心
春田打ち終へて近づくと地平線
みよし野の花の遅速を問ふまじく
三月二十九日 悼 宮地玲子様
散る花のなほ美しく惜しまるる

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十七年三月一日 ホトギス社吟行会

見えねども残雪の富士あの辺り
墓碑銘の虚子の筆跡冴返る
蛇穴を出れば力道山の墓
競ふことなく紅白の梅並ぶ
屋上のミモザ曇天引き寄せて

三月五日 蕉心会

誕生日おめでたう三月五日
啓蟄を待てず出て来る君は誰
蝌蚪の紐産んで去りゆく刹那かな
温む水凹ませてゐる浮子の黙
如月の川に暇釣る漢かな
屋形船水尾歪ませて涅槃西風
蝌蚪の紐明日へ震へてをりにけり
吃水を切り取るごとく水温む
新しき手摺が出来て磴うらら
未来てふ雌蕊残して椿落つ

三月六日 カトリック新聞選者吟

春隣生家で弥撤に与る日
三月七日 芦屋ホトトギス会
春雨に木花之開耶姫覚めず
駅一步より暖かき故郷かな
杞陽展出ればミモザの香と出会ひ
三月八日 野分会芦屋例会
もうちよつと負かりまへんか苗木市
決断を促す如く地虫出づ

啓蟄やこの道程を誤たず
苗木市売手は寡黙客多弁
三月九日 朝日カルチャー若草句会

春めくや東京駅の赤れんぐわ
百千鳥森へ誘ふ序曲かな
春水の底に七万トン眠る
百千鳥聖週間の聖歌とも
春めくや君の瞳に映る僕
三月十日 北國文芸選者吟
如月や北國いよよ近付ける
三月十二日 土筆会

草摘んで大地の鼓動聞いてをり
残る鴨ばつ悪さうに寄つて来し
梅咲いてやうやく江戸の風情かな
草摘んで地軸ずらしてをりにけり
莖立といふ天命を与へられ
三月十二日 俳句さく咲く収録
つばくらの一閃水面凹ませて
三月十四、十五日 関東ホトトギス俳句大会

暖かく甲斐の山並被さり来
残雪に表情硬き八ヶ岳
春の雪とは美しく疎ましく
舌うらら私にはちよと甘過ぎる
星を見た人富士を見た人うらら
薄氷を踏んでチャペルの黙を解く
木星の衛星並ぶ臍かな
三月十九日 登高会

鎌倉は近くて遠し彼岸かな
春の土活断層を宥めつつ

彼岸寺その後に待てる一忌日
春の土地球の底は忙しく
故郷に野遊心もて集ふ
三月二十、二十一日 「玄海」二百五十号記念大会

笑ふ山いくつ越え来て祝ぎの座へ
三月二十四日 若水句会
百宿踏まれて育つ四つ秦かな
曲水の宴藤原の商迎へ
曲水や恋を語るは常の如
三月二十五日 目黒学園句会

シャルドネにアスパラガスの今宵かな
土の色変り苗札変りけり
決め手とはアスパラガスの茹で時間
平日の教会といふ長閑かな
列島に鉄路伸びゆく長閑かな
苗札の知らぬ名の鉢買つてみる
三月二十六日 比良八講句碑除幕記念句会

八荒を集め湖心の白帆かな
八荒に育まれゆく碑の未来
三月二十八日 ホトトギス社句会

春田抜け春田ぬけ句碑除幕へと
タイガース開幕戦に勝ちうらら
魂を数多秘めたる春田かな
夜は星に解けゆくはだれ野の起伏
句碑除幕比良の斑雷に見下され
三月二十九日 野分会東京例会

地虫出づ足六本を持って余し
一枚の葉といふ柳や地虫出づ
蟻穴を出づ人間は家を出ず

雑詠 廣太郎 選

繋りて時代祭の時代かな 神戸 後藤立夫
 火祭の鞍馬の夜を焦しつつ 同
 瓢の笛てふはふと鳴るやうに鳴る 同
 露の身や小さき溜息終となり 高松 永森ケイ子
 語りし眼ゆつくり閉ぢし露の朝 同
 魂の秋風よりも軽かりし 同
 椋鳥の群れ遠心力に大うねり 神戸 立村霜衣
 光差す青き葉に末枯れし葉に 同
 ややありて葛湯心に効いてきし 同
 小望月にも必衰のありにけり 福山 竹下陶子
 原爆を知らざる小鳥来しドーム 同
 望月の芝に眠れる胡蝶かな 同
 灯など要らぬ家路や今日の月 米子 中村襄介
 大輪の雲の真中に望の月 同
 混じり合ふう行の調べちちる虫 同
 秋晴や風皆表向きとなる 香川 湯川 雅
 秋さうび人の愁ひの裏に散る 同
 大輪の小菊に負けてゐる香り 同

秋風の一語一語を聞いてゐる 熊本 岩岡中正
 胸の奥へと一すぢの秋の風 同
 健康に感謝して子規祀りけり 同
 空に赤蜻蛉池には緋鯉群れ 相模原 木村享史
 人乗せて浮いてゆく家秋出水 同
 目に見えぬ霧ある花鳥濡れてをり 同
 立冬へ地球傾くまでわづか 東京 橋本くに彦
 水音の硬さ響かせ暮の秋 同
 隅田川舟で下るも神の旅 同
 鰯雲一つ一つに乗る夕日 袋井 湖東紀子
 風音に追はるるやうに冬支度 同
 紅葉見る落ちて来さうな青空に 同
 秋祭 芝界隈の朝の顔 龍ヶ崎 今橋眞理子
 大空の端ひるがへし小鳥湧く 同
 青空の果ての果てまで秋深し 同
 赤い羽根葉としたる福音書 東京 大久保白村
 誰もこぬブルーベリーの紅葉どき 同
 寿福寺に頬白遊ぶ一忌日 同
 露の世のことなど伝へをられなむ 長岡 安原 葉
 秋惜み歩す洛北の一人旅 同
 みな下向したる峰寺露寒し 同
 野の彩の滲みやすくて露時雨 波川 木暮陶句郎
 あるときは絹の光沢霧走る 同
 霧の音夢二の森を抜けるとき 同

雑詠句評（二月号より）

が、この句は空全体を詠む事によって自然のダイナミックさや神秘さを表現するのに成功している。（度太郎）

鯛とてさげすまされし世もありし 長岡 安原 葉

しげ人・仁 義・さい雪
霜衣・純也・公次
一歩・雅 くに彦
佳乃・廣太郎

近年は、鯛の漁獲量が減少し、鯛の評価額が高くなっている。しかし漁獲量が豊富な時代には、「鯛とて」さげすまされていたのである。「鯛とて」は、鯛と言つてとか、鯛ということでの意であろう。作者は、時代の変遷と、鯛に対する人々の価値評価の変遷をしみじみと顧みていたのである。（仁義）

こちらは魚の「鯛」であるが、確かにこの魚は一般的には価格も安く、大量に捕獲されていた事も相俟つて下魚のような扱いはされていたところが、近年漁獲量が減り値段も跳ね上がった時期もあつたようだ。本当は美味しく、健康にも良いこの魚に対する愛情深い表現が心地良い。（廣太郎）

母の里まだ外厠ちちろ鳴く 神戸 日下徳一

ご母堂はお元気のだろうか。ご実家はかなりの山中なのではなからうか。もう故人となつた俳優の出ていたモノクロ映画で、

鯛雲空に傾斜のありにけり 八尾 山下美典

ある一方向に向かつて進んで行く鯛雲を見ていて大空に傾斜があると感じ取つたのである。空に傾斜などあるはずはないのだが、このように「ありにけり」と言い切られてしまうと、納得せざるを得ないのである。鯛雲の特質が十分に引き出された一句である。直感の一句である。（しげ人）

秋の空一面に「鯛雲」が出ると、一際秋を感じると共に、何か神秘的な気持にもなるのは筆者だけだろうか。この雲の名から、やはり空を大きく鯛が泳いでいる、という発想の句も多いと思う

トイレが外にある家が映っていたのを見た記憶がある。トイレは不浄な場所だからといって、家の中には作らなかつたと聞くが、冬はさぞ辛いだらうにと思う。深閑とした夜には蟋蟀どころか、虫時雨に包まれることもあるのではないか。衛生的な水洗トイレが当り前になった都会人からは、想像し難いシーンであろう。

(さい雪)

筆者も何軒か、所謂離れに御手洗のある家を訪れた経験があるが、夜、特に夜中を想像すると、何か幽霊でも出そうなイメージをどうしても持つてしまうのである。一つの時代と言ってしまうばそれまでであるが、秋、虫の音を聞きながら用を足す様子は、何か風情を感じるのである。(廣太郎)

〈以下略〉



天地有情

江子選

若駒にいくらでもある牧の草
 人の世に蝙蝠の飛ぶ夕暮も
 夜は星の宿ともなりて紅葉狩
 晴れてゆく空より小鳥こぼれきし
 猫の手も借りて障子をはづしけり
 襖はづして六甲の風強し
 山住みも六十年や後の月
 秋惜む空に草木に水音にも
 子にしかと伝へたきこと新松子
 神の指先より蔦の紅葉かな
 わが秋思遺影の妻も同じかも
 台風の進路曲つてくれにけり
 再びは訪ふことあらじ木の実降る
 目を凝らし見て後の月ほの暗く
 一と谷の葛の傍若無人かな
 句碑の秋虚子の径へと自づから
 やや寒のふつうに寒いより寒し
 竹伐つて六甲の空摩耶の空

神戸 後藤比奈夫
 同 今橋真理子
 龍ヶ崎
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 長岡 安原 葉
 同
 熊本 岩町中正
 同
 相模原 木村享史
 同
 東京 今井千鶴子
 同
 富山 若土白羊
 同
 神戸 後藤立夫
 同

水海月晩節愁ふこともなし
 同 浜崎素粒子
 四鮎弱りて竿を納めけり
 同
 霧や弾の届かぬ距離の敵
 福山 竹下陶子
 霧れる塹壕にゐて動かれず
 同
 牛膝たつぷり付けて都心まで
 吹田 大橋 暁
 百姓をまだ続くと新米来
 同
 山国の霧の月夜と思ふべし
 東京 河野美奇
 同
 奥入瀬の錦秋ひかり水明り
 同
 須磨案内せしが名残の露の秋
 神戸 千原叡子
 同
 子規語る露けき声の耳朶にあり
 同
 長月の昼の日ざしに油断せし
 東京 山田閨子
 同
 鳴き止まぬ外人墓地の鉦叩
 同
 どことなく煌めいてゐて紅葉冷
 神戸 和田華凜
 同
 桂川から鴨川へ紅葉川
 同
 日かげりて細き枝先春浅き
 東京 今井肖子
 同
 蕾すこし空に残して濃紅梅
 同
 晴子忌の年尾忌の来る後の月
 熱海 嶋田一步
 同
 寿福寺へ今年も行けず後の月
 同

転倒

稲畑汀子

狭い路地を通り抜けて行く足元は、何時も特に気をつけて通って行くのに、とととと二三歩前に行きながら私は転んで仕舞っていた。「え？」転ぶ筈はない。自分は充分注意をして歩いているという自負もあった。でも現実には狭い路地に這いつくばって、どうしたらいいか頭がぐるぐる回っていた。顔から地面に落ちていた。前歯が折れていた。その所在を探して手に触れたので慌てて拾った。駐車場から通路へ出る細い道は一人が通れる位の狭い通路である。がーんと顔かろ火が吹くような漫画の一場面に目に浮かんだ。「先生、大丈夫ですか？」私の運転の助手席で一緒にいた叡子さんの声が後ろかち聞こえた。前から二人の若者が来て「あ！大変だ。血が吹いてますよ。ちよつと待つて下さいよ、いまガーゼとアルコールを持って来ますから」と言うや、すぐに引き返してきて「さあ、これで拭いて下さい。今、救急車を呼びますから」手早く次々手を貸してくれる若者一人が甲斐甲斐しく助けの手を貸してくれた。「ありがとうございます」というのが精一杯で、名前を聞こうとする余裕がなかった。救急車が来て叡子さんも乗って下さった。今日、これから大阪倶楽部で倶楽

部合同句会があるので先生として二人は出席することになった。

「叡子さん貴女まで救急車に乗ったら合同句会が困るじゃない」

「大丈夫です。まだ時間がありますから。私、先生の大事な荷物をしっかり握っていますから安心して下さい」

「ごめんなさい。でも俳句会が困るのでは」

「先生、何とかしますから。心配しないで下さい」

救急車はびーびーと鳴りしながら大手前救急病院へ着いていた。ここは大阪城に近いことが分った。「よいしょ」という掛け声と一緒に処置室のベットへ移された。

「CTを撮りますから」

「はい、宜しく」

「どこか痛いところはありますか」

「顔を初めとして、左胸の肋骨、足腰は大丈夫です」

若い先生がてきばきと質問される。レントゲン室を出てさっきの場所に帰ってくると、本郷桂子さんが待つていて下さった。

「あら、貴女ー俳句会は？」

「大丈夫、叡子さんと交代しました。安心して下さい」

「処置が済んだら俳句会にご一緒するわ」

「先生、まだまだ駄目ですよ」

若い先生が戻ってきて、

「鼻の骨が少し折れています。脳は何ともありませんでした。でも今夜一晩入院して下さい」

「え？今から俳句会に行きたいのですが」

「そんなことは無理ですよ。一日たつて具合の悪い症状が出るこ
とがあるので今日は泊っていただきます」

覚悟を決めた。自分が転んだのだから仕方がない。

「起き上がってはいけませんか？」

「いいですよ。起き上がれますか」

「さあ、やってみなければ。起きてもいいのですね」

「はい、やってみて下さる」

よいしょ！と上半身を起こしてみたら、ふらふらしながら起き

上がる事が出来て、すぐにふらつきが無くなった。

「大丈夫です。色々ありがとうございます」

「今夜一晩入院するのに大部屋でいいですか？」

「出来れば一人になれませんか？」

「少し高くなりますよ」

「分かりました。先生！ よろしくお願い致します」

一人部屋はトイレシャワー付きでテレビもある少し広い部屋で
あるが、窓の向こうのビルは手の届きそうなところにあった。

俳句会が済んで、井上浩一郎さんも来て下さった。

「ごめんなさいね。私の不注意でご迷惑をおかけしてしまって」

「三十分締切を延ばして、順調に俳句会を済ませました。皆さん
びつくりされてましたよ。大事になさって下さい」

乗って来た私の車を取りに吉田先生が来て下さり、桂子さんを
送り方々芦屋へ持って帰って下さることになった。

浩一郎さんが帰られたら急に淋しくなった。芦屋に居ても一
人なのだから平気、平気と強がっていたのにふっと悲しかった。
手鏡に映る自分の顔にびつくりした。限取りをした歌舞伎の仁
木弾正がそこに居たのである。

